～～～

対面リーディング通信

2018年 4月

2018年4月1日 発行　　第１８１号（隔月刊）
～～～

警報時のボランティア活動の休止基準の変更について

　当館では4月から、大阪市内に「暴風警報」か「特別警報」のいずれかが出た場合、以下のようにボランティア活動と館内サービスを休止させて頂きます。

①午前7時現在、大阪市内に暴風警報か特別警報が出ている場合＝午後1時まで休止

②午前10時現在、いずれかの警報が出ている場合＝全日休止

③午前10時以降にいずれかの警報が出た場合＝警報が出た時点で休止

④その他、館長が危険と判断した場合は休館することがある

　これまでは「暴風」「大雨」「洪水」等すべての気象警報を対象とし、適用地域も「大阪府内」としていましたが、実状に合わせて規定を変更しました。どうぞご了承下さい。
　もちろん上記の規定に当てはまらない場合でも、お住まいの地域に警報が出ていたり、交通機関に影響が出ている場合など、ご来館が無理な時はお休み頂いて結構です。なによりも安全を第一にご判断下さい。
　職員は可能な限り出勤し業務を行いますので、ご不明な場合はご連絡下さい。

【連絡先番号】
　06－6136－7704（対面専用番号）
　06－6441－0015（情報文化センター代表番号）

今月号の主な内容

対面リーディングと私	対面リーディングと私	山崎　彰	2
誌上勉強会	言葉を説明する	木村　謹治	3
寄り道・回り道	割烹　堂島	木村　謹治	8
情報発信	NHKアナウンサーの豊かな日本語（その1）	望月　明	9
お知らせほか			１２

対面リーディングと私

対面リーディングボランティア　山崎（やまざき）　彰（あきら）

「情報文化センターで対面を始めたきっかけは何ですか？」

対面リーディングに出会ったのは「偶然」でした。還暦を迎えるにあたって、新しいことを5つ始めたのですが、そのうちの「朗読」の講習を受けている中でライトハウスや対面リーディングのことを知りました。

はじめは、抑揚をつけて表現する「朗読」と視覚障碍者の眼の代わりである「音訳」との違いも知らなかったのですが、ボランティアを希望してすぐにたくさんの利用者さんとの対面を経験したことで、実践的に理解を深めることが出来たと感じています。

「対面活動の中で心に残ったことがあれば教えてください」

対面リーディングの活動を通して、ボランティア友の会の世話人を約十年致しました。

世話人として友の会の会則を作成したり、情報文化センターの移転にあたっては、館の皆様と一緒に活動することもありました。利用者の方々から多くの元気と知識そして貴重なご経験を聞かせて頂くこともできました。

このような事柄から得た様々な出会いや考え方は、対面リーディングの活動だけでなく、私自身の大きなプラスになっています。対面リーディングにめぐり合ったことに大変感謝しています。

「最後に一言お願いします」

対面で一番大切にしていることは「お互いの2時間を楽しく過ごすこと」です。
どうすれば良いかは、利用者さんによって変わります。たくさん読むこと、じっくり読むこと、あるいはお話しすること、楽しさの要素は様々です。

「対面だからしっかり資料を読まなくてはいけない」ということだけに囚われることなく、まずはお相手の利用者さんが、どのようなことを希望されているか、対話の中で探し、工夫しなければいけないと思っています。

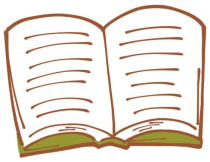
★職員より

活動20年以上になる山崎さんのお話を伺い、対面リーディングは、利用者さんの眼の代わりとして直接対応する大切な第一線であることを改めて感じました。

また、多くのボランティアさんの中には、利用者さんに役立つ様々なスキルを持つ方がおられるので、それを最大限に生かせると良いですね、とのアドバイスも頂きました。

利用者さんとボランティアさんの2時間が楽しいものとなるよう、職員も一層精進したいと思います。

山崎さん、どうもありがとうございました！



木村 謹治（きむら きんじ）

対面リーディングの実際 ２６

― 言葉を説明する ―

「説明下手」をWebで検索すると「簡潔に」「正確に」「明瞭に」伝えることが苦手な人であるともいえますと書いてありました。

主にビジネス関係者対象に書かれたものですが、対面リーディングにも共通点があります。

ビジネスの場面では自分の仕事や商品の説明など、本人が関係する事が主なのですが、対面リーディングでは、自分が熟知していない事でも説明しなければなりません。より難しいと言えます。

注意しなければならないのは、学校の先生のように図書の内容を解説するのではありません。

説明とは、そのことを知らない人や分からない人に、理解してもらうために行うものです。ですから分からない部分を残したら、説明とはいえません。

また、説明を終えて、相手がけげんそうな顔をしていたら、「なぜ、こんな簡単なことが理解できないのだろう？」と相手の理解力を疑う前に、自分の説明力を疑った方がいいと思われます。

説明の難しいものに「色」があります。

色の理解は経験に大きく左右されます。見えていた時期のある人は、見えなくなってからもそのときの経験を利用できますが、そうでない人の場合は、色の理解は純粋に概念的になります。「赤い色が好き」と言った全盲の女性の場合は、あるカテゴリーに対する名前として色を認識しているそうです。たとえば、りんご、トマト、さくらんぼ、血などが含まれるカテゴリーが〈赤〉、空、水、魚、海などが含まれるカテゴリーが〈青〉と言った具合です。彼女の場合、「赤が好き」とは、「〈赤〉というカテゴリーに含まれるものが好き」と、およそ同じ意味ということになります。知覚経験としての赤は知らないけれど、カテゴリーとしての赤は知っている、ということです。（『考えるメディア』）

紫堂（しどう）恭子の『辺境警備　星が生まれた谷』という漫画に目の不自由な女の子が母親に色を説明してもらった回想で

「桃色は子犬を抱いた気持ちみたいな色　緑は初めてあったかい風が吹いて外へ飛び出したくなる気持ち　白は洗いたてのシーツにねころんだ気持ちよさ　蒼は薬草で作った香　乾いた風が渡る荒野　草の葉をぬらす冷たい雨の匂い」

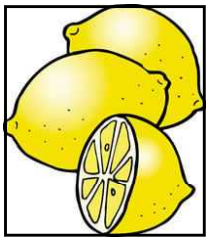
という表現があります。すごく詩的でいいなぁと思いますが、これで色の説明が出来たとは思われません。

前述の『考えるメディア（https://media.style.co.jp/2015/09/2557/）』には色について下記のように書かれています。長くなりますが興味深いので転載します。

見えていた時期のある人の場合はどうでしょうか。「経験」というのもまた不思議なもので、いろいろ話をうかがってみると、どうやらただ見ただけでは経験にならないのだそうです。つまり、見たという知覚に、概念

（色の名前）が伴ってはじめて、それは経験としてストックされるのだそうです。

たとえば、幼い頃に「これはレモン色だ」と思ってレモン色に相当する色を知覚した人は、見えなくなってからも、「レモン色」と言われればその色を引き出すことができます。けれども、たとえばやまぶき色に相当する色を見ていたとしても、それを「やまぶき色として」見たのでなければ、記憶されず、したがって見えなくなってから引き出すこともできないのだそうです。小学生のころに弱視になったKさんの言い方を借りれば「ファイル名がついていないものは保存されない」のです。



では、見えない人の経験によってストックされていない色、つまり名前を言われても引き出す情報がない色については、もはや伝えることができないのでしょうか。答えは、「イエス」とも言えるし、「ノー」とも言えます。伝えることはできるのですが、見える人がふつう使う意味での「伝わる」とはちょっと違う意味での「伝わる」なのです。

見えない人に色を伝えるにはどうしたらいいか。見える人がやってしまいがちなミスは、「青みがかった灰色です」のような伝え方です。なぜ「青みがかった灰色」はNGなのか。それは、この表現が「灰色に青を少し混ぜる」という混色の現象にもとづいているからです。

見える人が「青みがかった灰色」と聞いて理解できるのは、「灰色に青を少し混ぜるとどうなるか」を経験的に知っているからです。つまり、絵の具遊びなどで、複数の色を特定の割合で混ぜるとどのように色が変化するのか、目で見て確かめたことがあるからです。

ところが、こうした混色を見たことがない人からすれば、青と灰色を混ぜるのは、海とねずみを混ぜるような出来事に感じられることでしょう。これでは納得できないのも尤(もっと)もです。

ではどのように伝えればいいか。それには、「ほっとする色」「不安になる色」のように、感情や印象などの主観的な効果にのせて伝えることが有効です。Sさんというミュージシャンの全盲の方の言い方を借りれば、そのような表現をすることで色が「動き出す」。そうすると伝わるのだそうです。

もちろん、「ほっとする色」という表現では、色そのものの視覚情報が伝わるわけではありません。その意味では、色は伝わってはいません。しかし、その色を見た人が受けた印象や感情、つまり色の与える効果は、見えない人に伝わっています。色そのものは共有していないけれど、見た人の印象や感情は追体験している。つまり「なるほど、その色はこういう感じなのね」という「共感」は起こっているのです。いわば「共有なしの共感」とでも言うべきコミュニケーションが、ここにはあります。

面白いのは、こうやって見える人が色を言葉にしていくと、その表現が人によって実にさまざまであることです。同じ色を見てほっとする人がいるかと思えば火事を連想する人がいるし、ある人が渋いと言った色が、別の人にとっては透明感のある色と形容されたりします。同じことは物の形についても言うことができるでしょう。私たちは、同じ物を見ながら実は相当違うものを見ているようです。

（以上『考えるメディア』より）

また、当センター点字製作係の小原二三夫さんは『視覚障害と美術』（http://www5c.biglobe.ne.jp/obara/kouen/kouen17.htm）の中で下記のように書いています。

●色について

色ないし色合いの説明の仕方には、大きく次の2つがあります。

①直接色を説明する

まず、赤、青、黄、緑、紫など、基本的な色名を言います。茶色やピンクも、これに加えてもいいでしょう。また、白・黒・灰色のような無彩色もこれにふくまれます。これらの色については、先天盲(せんてんもう)でもこれまでの生活の中で会話や読書などを通して、多くの場合その人なりにある程度は色のイメージを持っ

ています。

そして必要なら、これらの基本的な色名を組合せて、例えば、赤紫、黄緑、青緑などと言います。これでだいぶ理解できそうな色名が増えます。

次に、これらの各色について、「濃い／薄い」「明るい／暗い」「鮮やかな／くすんだ」というような修飾語を付けて説明します。そうすると、多彩な色合いがかなりよく表現できます。

このような色の説明の仕方は、JISの色彩に関する企画（JIS Z8102: 2001 物体色の色名）でも使われるなど、ごくふつうに行われているものです。

②具体的な物の色とセットにして説明する

色の説明は、単に赤とか緑とかいうのではなく、どんな赤なのか緑なのかを、できるだけ具体的な物と結びつけて説明するとよりはっきりしたイメージが伝わります。視覚経験のある中途失明の方にはこの方法がとくに有効でしょう。

例えば、赤については、赤ワインのような赤、燃える炎のような赤、熟れたリンゴのような真赤など、緑については、若葉のような黄緑、椿の葉のような濃い緑などのようにです。

色名には、空色、水色、藤色、鴇色（ときいろ）、ワインレッドなど、物の名前そのものが色名になっているもの（固有色）もたくさんあって、中途失明の方には端的にこのような色名を使うと説明しやすくなります。（先天盲の場合には、物そのものの色を示す固有色は、あまり馴染みのないものが多いです。）

色名にはしばしば、実際の物の色を示すだけでなく、人の特定の感情や気分と強く結び付いているものもあります。例えば、ばら色は希望や幸せ（「薔薇色の人生」「薔薇色の日々」など）、鉛色は憂鬱な重い気分（「鉛色の空」と強く結びついています。このような色名から連想される感情や気分と、作品そのものの印象はかならずしも一致するわけではないので、注意が必要です。　（以上）

RICOH Communication Club のホームページにも下記のように書かれています。

テレビやインターネット、各種プレゼンテーション等、最近は、図やイラストを使用して説明する機会が多くなってきました。しかし、相手の状況が見えない電話での説明や、視覚障がい者に説明する際には、少し工夫が必要になります。

では、視覚的な情報を使わずにわかりやすく説明するには、どのようにすればよいのでしょうか。今回は、言葉により説明する際のポイントについて紹介いたします。

と前書きがあって、「色の説明」の項には以下のように説明されています。

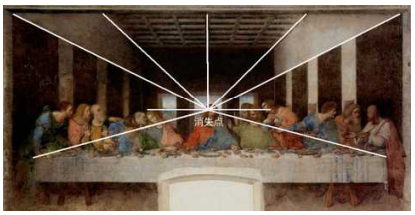
色を説明する時は、赤、青、黄色といった表現方法だけでなく、「空のような青」、「燃えるような赤」、「可愛らしいピンク」等、色のイメージを説明することにより、より相手に伝わりやすくなるだけでなく、色を見たことのない人でもイメージしやすくなります。

いずれの意見でも色を見た人が受けた印象や感情、イメージを添えて説明すると分かりやすいと書かれています。

では、生活の場で色はどの様に理解されているのでしょうか。

京都で開かれた視覚障害者のための「カラーコーディネート講座」では、受講者からは、「おしゃれが好きなので、自分に似合う色をもっと知りたい」といった声が聞かれました。

視覚障害がある人の間で高まる“いろ”を楽しみたい、というニーズ。しかし、こうした人たちが、誰かにアドバイスを受けずに自分で服を選ぶことは、なかなか難しいのが実情です。



もう一つ難しいのが絵や写真の説明や空間認識です。

有名なダ・ヴィンチの『最後の晩餐』では中央に描かれているのはキリストと想像できます。が、左右に描かれている人物名を知っている人は殆どいないと思います。右側に何

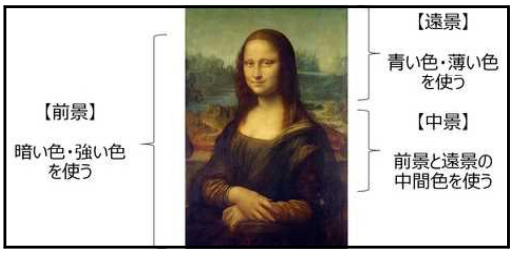
名、左側に何名描かれていると説明するしかないのでしょうか。左右と言っても見る人からなのか、キリストから見て左右なのかでは正反対になります。

絵の好きな人には透視図法で書かれている事が分かります。キリストの頭の向こう側が消失点となっています。これを理解しながら鑑賞している人もおられますが、ここまで説明するのは解説になってしまいます。

見える人にとって遠近法は当たり前の事ですが、考えてみると、線路の巾が遠くに行くほど細くなるのもおかしな話ですね。

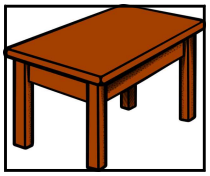
ジオラマの線路を手で辿っていっても、どこまでも同じ巾です。実際の線路も巾が違ってくると脱線します。

有名な『モナリザ』も空気遠近法という手法で描かれています。前景は黒い色や強い色を使い、遠景ほど青い色や薄い色を使い遠近感を出しています。



空気遠近法という言葉は別として、遠景が薄い緑色になっている事は説明してもいいでしょう。

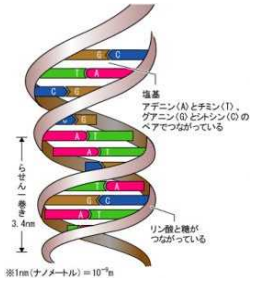
絵の説明は本当に難しいです。子供でも書ける机の絵でも、実際の机を触れば脚の長さはどれも同じなのに絵では陰に隠れて１本だけが短く見えます。



いずれも、子供の時から現物も絵も何度も見て、経験しているのでこの描き方で当たり前のように感じます。

では、知らないものを説明された時はどうでしょうか。ご自身の体験を思い出してください。

例えばＤＮＡ。テレビや新聞で二重螺旋（らせん）構造をよく見かけるようになりました。これなら話を聞いてもなんとなく分かります。



では二重螺旋階段はいかがでしょうか。

フランスロワール地方にはシャンボール城があります。優雅な城とともに有名なのはレオナルド・ダ・ビンチが設計したと言われている二重螺旋階段です。

あまりにも美しすぎて、そちらに気を奪われて、階段の構造を理解するには至りませんでした。後日、資料を読んだり、写真を見たりするのですが、今ひとつピンときません。

日本にも福島県会津若松市にある栄螺（さざえ）堂も二重螺旋階段になっています。機会があればぜひ見に行ってください。どんな構造になっているか理解しにくいです。

山登りには国土地理院発行の地図が役立ちますが、等高線を見ても山の起伏が見えてきません。慣れた人は山や谷の形が見えてくるようですが。

山でなくても知らない地に行く場合は地図を見ます。地図を参考に町の景色を見ながら歩いても町全体の様子はなかなかつかめません。

たまたま、超高層ビルの展望台から見下ろして、こんな風になっているのかと感心する事があります。

実際に目にしたものでも、構造や空間的な広がりを理解できるとは限りません。

まして、見た事もないものを説明することは大変な困難を伴います。

視覚障害者に形を理解してもらう方法として触る本とか、点図（てんず）、立体模型などがあります。視覚の代わりに触覚に頼る方法ですが、

いずれも一長一短があります。
　実際に触って経験していただくのが触覚の世界を感じ取る一番いい方法です。情文にも色々揃っています。一度触ってみませんか。
　３階エレベーターを出て、左側には点字の発明者ルイ・ブライユ立体画とヘレン・ケラーとサリバン先生の立体画があります。

　ただし、触る前に現物を見るのはだめです。一旦、視覚からの情報が入ると、いずれの作品もうまく出来ているように感じるものです。
　いきなり触ると人物であることすら分からないかも知れません。

　昨年『音声ガイドで楽しむ、視覚障害者の絵画鑑賞』が開催されました。美術作品に近づくと、持っているスマートフォンが作品上部に設置されているビーコンから信号を受信します。アプリが対象作品の鑑賞ガイドを再生し、骨伝導ヘッドホンを通じて音を届ける仕組みです。
　その作品の解説の一つを下に書きます。解説を読みながら絵を頭に描いてください。
　濃い青色の長方形の上に、様々な形をした赤、黄色、オレンジ、白、黒の色面が、バン、バン、バンと大胆に画面に配置されています。
　それぞれの色は自己主張しながら、お互いを際立たせています。黄色に目をやれば、青が際立って見え、黒に目をやれば白が輝きを増しています。
　様々な色の形の中でも、ひときわ目を引くのは、画面の右側の、長い髪を振り乱し、体をくねらせた人物の黒いシルエットです。
　この黒いシルエットは、やや斜めに置かれた白い長方形の中に配置されることで、まるでスポットライトを浴びながら踊っている人のように見えます。　　（以上）

　いかがですか、言葉は理解できても絵は浮かんでこないですね。
　カラーの絵なので出来れば、日本ライトハウス情報文化センターのホームページの『刊行物』をクリックし、『対面リーディング通信』選んで見ていただくと、この紙面がカラーで表示されます。

　こんな絵（右上）でした。抽象画の説明は難しいですね。

　最近のＡＩの進歩はすごいです。将棋の世界ではコンピュータが人間に勝つ時代です。
　視覚障害者にも写真をシェア（共有）する喜びをと言うわけで、フェイスブックでは、ネット上にアップされている写真に自動で解説を付ける試みがされていますが、まだまだ実用的なものになりません。
　マイクロソフトも「ワード」と「パワーポイント」で写真の説明を自動生成し、文書に加えられるようになると発表しました。が、こちらも実用的な段階には到達していません。

　説明が難しいと思っても、黙っておれば何も通じません。基本は自分の感じたことを伝えることから始めるのが一番でしょう。
　ただ、簡潔に説明する稽古を積んでいただくことが大事です。
　教え好きな人が陥りやすい説明の欠点は、つい余計な説明をしがちです。
　自分で本を読む時を思い出してください。絵や写真を長い時間眺めている事は少ないと思います。
　もう一つ、家族でも、友達でも、聞き手を探して、説明の練習をするのも１つです。但し、相手には写真や絵を見せないで下さい。見てしまうと、正しい評価は出来ません。

　さらに、読み手にも聞き手にも慣れが必要です。回を重ねるほど、少しずつですが、読み手はこつを掴み、聞き手は説明内容を理解しやすくなるはずです。
　まずは説明を恐れず、一歩から。

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

割烹 堂島

【所在地】　大阪市北区堂島１-4-24 にしきビル1F
【電話番号】　06-6344-2307
【行き方】　ＪＲ東西線北新地駅　11番出口　徒歩5分
【営業時間】　月～金、祝前日: 11:30～13:30／17:00～22:30　土: 17:00～22:30
【定休日】　日・祝日
【URL】　http://www.kappo-doujima.com/index.html

堂島アバンザの南側の道路を東（南に向かって左側）へ進むと左手に国際モータープールが見えてきます。その向かいが「割烹堂島」です。大きなのれんが目印です。

奥まった玄関のドアーは趣があり、一見押戸か引き戸が分からなく、目をこらして近づくとグゥイーンと開いて、自動ドアーでした。

意表を突かれたのですが中に入ると落ち着いた和の雰囲気。

廊下を進むとL字カウンター９席があります。奥には４部屋の個室があるのだそうです。

完全個室の掘りごたつ式で、宮大工が手掛けた内装に趣のある京の風情を味わえるようです。2名から18名まで利用可能なのでグループで利用するときはこちらが良さそうです。ランチであれば個室は無料です。

店はここで40年もの歴史がある割烹です。さすがに北新地、少し素朴だけれど高級感ある作りになっています。

メニューは

おばんざい膳　980円
おばんざいと天婦羅　1280円
にゅう麺と天婦羅　1030円
天婦羅膳　1030円
牡蠣フライ膳　1200円
点心　1650円
季節弁当　1950円
松花堂　3050円
お昼の会席　4700円より

となっており、「点心」以下は前日より要予約だそうです。

おばんざいと天婦羅を食べました。

ご飯、赤だし、漬物におばんざいとして小鉢5品、それと天ぷらです。おばんざいは季節によって異なります。

正統派懐石料理と言うのでしょうか、彩り美しく、味つけもいい。接客もいい。とてもいいお店です。こんなにも上質な空間と料理をリーズナブルに美味しく堪能できて、とても素晴らしかったです。

夜は、高いですよ。厚めの財布をご用意！

『NHKアナウンサーの‘はなす　きく　よむ’豊かな日本語編』(その1)

対面リーディング・ボランティア　望月（もちづき）　明（あきら）

以下の内容は「ＮＨＫアナウンサーの‘はなす　きく　よむ’豊かな日本語編」（2006年４月発行・日本放送出版協会）より抜粋し、要約したものです。

（本書‘はじめに’より）“このテキストが、他の多くのハウツー本と違うのは、「話しことば」の最前線で仕事をしている現役のアナウンサーが、自分自身の体験に基づいて書いている点です。

私たちＮＨＫのアナウンサーは、80年前から、まだ黎明期だった「日本の話し言葉」確立のために格闘して来ました。先輩アナが苦しんで辿りついた一つの結論を踏まえ、その上に更に自分の体験を重ねて、その時代に相応しい表現法を探ってきました。そんな私たちが今、手にしている最新の方法論を、出来るだけ一般の方にも分かり易くお伝えしようとしています。”

■意味を考えて読む

＊声にするだけで満足していないか？

・タイトルの「意味を考えて読む」とは、「意味を分かって意味通り読む」ということ。当たり前でしょと一蹴する前に、ちょっと待って！。**怖いのは、声に出して読むだけで、達成感が得られてしまうこと。**意味が伝わらない、単なる文字の音声化だったとしても、**本人は読み切ったことに満足してしまって、気付いていない**ことがある。

・それなりに抑揚をつけている積りで、実は意味と違うところを、高く読んだり低く読んだりしていないか。又は、**自分の息継ぎに都合の良い様に「間」を取っていることはないか。**

・どのようなポイントで意味を考えればよいのか。
①「イントネーションと言葉の切り方」
②「意味通りに伝えるために気をつける点」という二つのテーマで考える。

＊音の高さで意味が変わる！

・**①イントネーション**。つまり、抑揚をつけることで、文字の羅列が生き生きとした文章になる。例えば、説明文や命令文では、語尾が自然に下がり、反対に疑問文は語尾が上がる。

注意しなければならないのは、話し言葉の中では自然に出来ることも、**書かれているものを読むと、不自然なイントネーションになってしまうこと。そして、同じ言葉でもイントネーションの違いによって、意味が変わる場合があること。**

＜**例文１**＞〇〇市の植物園では百万本のハナショウブが**美しい花**を咲かせ、見ごろになっている。

＜**例文２**＞葉が赤や白に色づいて**美しい花**のように見えるポインセチアの出荷が、△△市で始まった。

二つの文に出てくる「美しい花」。言葉は同じでも、文章の中での意味合いが違う。日本語は高い音から始まって、自然に音程が下がっていくものなので「美しい花」は、「花」より「美しい」が高い音になる。＜例文１＞は、その読み方で正解。

ところが、＜例文２＞は違う。この文では、「美しい」より「花」を強調したい。**ポインセチアの、あのきれいな赤い部分は、実は「花」ではなくて「葉」である**という念押しの意味が含まれている。

では、もし＜例文１＞で、「花」を強調した読みをしたらどうか。「花のほかに咲かせるものがあるの？」と指摘されてしまうだろう。

＊「間」は息継ぎのため？

・**②意味通りに読むためにもう一つ重要なのが「間」の取り方。**どこで「間」を取るか、どのくらいの長さの「間」を取るか、テクニックが必要。

ふつうは、句読点で「間」を取って、その時一緒に息継ぎをする。しかし、意味通りに読むことを優先した場合、必ずしも息継ぎにタイミングのいいところで「間」を取ることは出来ない。多少、息が苦しくても、続けて読みたいところもあれば、息継ぎの必要がなくても、「間」を空けた方が効果的な場面もある。例えば、先に出てきた＜例文２＞の文章を見てみよう。

「葉が赤や白に色づいて美しい花のように見えるポインセチアの出荷が、△△市で始まった。」

・どこで「間」を取ればよいか。読点のある「出荷が」の後が正解。この読点の「間」だけで読むのが一番だが、ここに来るまでが少し長いので、どこかこの前で「間」を取ることが出来ないか。

・まず、文章を思い切って簡単にしてみる。つまり、「**何がどうした**」という文を作る。それが**「出荷が始まった」**。これに、何の？、どんな？という修飾を付ける。「△△市で」という言葉は、前に持ってくる。

・**「ポインセチアの出荷が、△△市で始まった」**⇒「*花のように見える*ポインセチアの出荷が、△△市で始まった」⇒「*赤や白に色づいて美しい花のように見える*ポインセチアの出荷が、△△市で始まった」⇒「*葉が赤や白に色づいて美しい花のように見える*ポインセチアの出荷が、△△市で始まった」。

こうして少しずつ言葉を足しながら、切ってもおかしくないポイントを探す。

・ここで気付きたいのが**「間」の効果として、「間」を取った次の言葉が強調される**ということ。

１つの読み方として「葉が赤や白に色づいて(読点)、美しい花のように見える(読点)、ポインセチアの出荷が(読点)、△△市で始まった」。**核になる情報は「ポインセチアの出荷が、△△市で始まった」**なので、**「間」の長さに変化をつける工夫をすることが大事。**

＊意味を考えるとは、相手に寄り添うこと

・「実りの秋を迎えて、サツマイモの収穫が行なわれている」。

・この１つの文でも、頭に本当のサツマイモをイメージして声にするのと、そうでないのとでは、聞こえる印象も大分変わってくるのではないか。特別、抑揚をつけるということではない。

ただ、**ちょっと思い浮かべるだけで、文字は、血の通う言葉になるのではないか。**長くて難解な文章なら、なおさら自分がしっかり分かっていなければならない。

・**‘これはどういう意味なのかな’という疑問や、こういう感じで読めばいいのだろうかという不安な気持ちは声に出るし、聞き手にも伝わる。自分が分かりにくいと思う部分は、聞いている人にとっても分かりにくい。**

・**まず自分が理解し、自分自身に言い聞かせるつもりで読むのも１つの方法。**意味を考えること。それは相手の心に寄り添うための第一歩。

■声に出して読む

＊大切なのは、意味を理解すること

声を出して読む。読んで伝える。その時に**一番大切なのは、内容を理解すること。**一つ一つの文の意味はもちろん、文章全体を通して、**作者が伝えたいメッセージは何か、それを分かることが、読んで伝える第一歩。**

＊メッセージを伝えるために

・読み手の手元には原稿があるが、聞いている人の手元にはない。活字で伝える新聞のニュースは、たとえ一部の意味が理解出来なくても、前後の文脈から推測することが出来る。分からなければ、もう一度最初から読み直すことも出来る。

・しかし、音声で伝える場合は、そうはいかない。**聞いている人が、今のは一体どういう意味だろうと、一瞬でも疑問を持った途端、そこから後のニュースは頭に入って来ない。**ニュースの内容が、聞いている人に伝わらなくなってしまう。

・文章は、主語と述語、そして飾りの修飾語で出来ている。**聞き手に理解を促す上で一番大切なのは、主語と述語を理解させること。読み手が、骨組みとなる主語と述語の構造をしっかり理解し音声表現すれば、聞き手は、文章の意味を理解できる。**

・**声を出して読む時は、**

①主語と述語の構造を理解すること

②自分の息の都合ではなく、意味の切れ目で読むこと

＊「読む」から「話す」へ

大切なのは、意味をしっかり理解して、伝えたいという意識を持つこと。

次のニュースは、鳥インフルエンザの拡大を防ぐため、屋外で鳥を飼育することをドイツ政府が禁止する措置を取ったというニュースの一部分。

＜ステップ１　黙読してみる＞

・ヨーロッパで鳥インフルエンザが相次いで確認されていることから**ドイツ政府は**19日、感染を拡大させている恐れのある渡り鳥との接触を避けるため、当面ニワトリなどの鳥類を屋外で飼育することを**禁止すると発表しました。**

「ヨーロッパで～～確認されていることから」までは、**事件の背景**が書かれている。

その次が本題。主語は「ドイツ政府は」、述語は「禁止すると発表しました」。これが文章の骨格。次に、修飾語「感染を～～避けるため」までが、鳥の飼育を屋外で禁止にした原因で、その後は、ドイツ政府が取った対策。このように**まず、文章の内容をしっかり理解する。**

＜ステップ２　体の準備＞

体はリラックスして、肩の力を抜く。力が入り過ぎては、いい発声は出来ない。**口や舌を上下、左右に動かす。**滑らかに発声するため、舌と口の筋肉を柔らかくする。「あー」と口を縦に開けて、**出来るだけ大きな声で発声**する。**４メートルから５メートル先の人に届ける気持ちで発声。**そして、のどを少し暖める。（その２へ続きます）

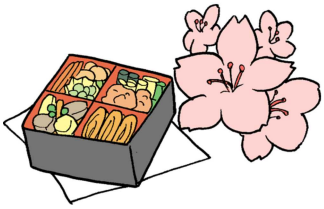
ありがとうございます

3月8日（木）に行われたボランティア交流会において、
対面リーディングで長年ご活動いただいているお二人が表彰を受けられました。

・奥井秀子（おくい　ひでこ）さん
30年以上対面をしていただいています。毎回対面が終わったとたんに次の対面のお約束をさせていただきますが、いつも快くお引き受けくださいます。最近は経済小説や新聞を読んでくださっています。

・山崎彰（やまざき　あきら）さん
20年以上対面をしていただいています。対面では人物伝、ドキュメンタリー作品などを読んでいただいています。対面ボランティアとして友の会の世話人を約10年にわたってしていただいていました。その間会長もお引き受けいただくなど、館全体の活動にも深くかかわっていただいています。

お知らせ



・4月から対面の担当職員が変わります

今年の3月までの2年間は山岡と福田の2名が対面リーディングを担当しておりましたが、４月から山岡がアルテ別館（図書貸出）の専任となるため、担当を外れることになりました。
新年度からは福田と新任職員の2名が対面リーディングの担当職員となります。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。なお、山岡と新任職員のご挨拶は次号に掲載する予定です。

・4月のオープンデーについて

毎月１回、第２土曜日に開催している「オープンデー」は、どなたでもご参加いただける館内見学会です。時間は13時30分から約２時間、普段はご覧頂けない製作部門などへもご案内します。費用は無料です。参加ご希望の方は対面担当までご予約をお願いします。
当館でのボランティア活動を行う上で、館内の様子や活動内容を知っていただく事はとても大切です。１度は必ず館内見学へのご参加をお願いします。
４月は第２土曜日の14日に開催します。

待ちに待った太陽の塔の内部公開が始まりました。しかしながら大人気で予約は夏まで一杯とのこと。年内に見に行ければ良いなあと、気長に楽しみにしています。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）